

公民館の卓球サークルにおける高齢 1) の会員の思 い : 『会報』の「寄稿文・感想文」を手がかりに

村上, 康子
九州大学大学院人間環境学府 : 科目等履修生

<https://doi.org/10.15017/7172575>

出版情報 : 社会教育研究紀要. 5, pp.21-28, 2024-02-29. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



公民館の卓球サークルにおける高齢¹⁾の会員の思い

—『会報』の「寄稿文・感想文」を手がかりに—

The Reasons Why Elderly Members Join the Table Tennis Circle in Kominkan with Enthusiasm

— Based on the “Contributions and Impressions” in the Newsletter of the Table Tennis Association of Housewives in Fukuoka City —

村上 康子^{*}

Murakami Yasuko

はじめに

福岡市主婦卓球愛好会（以下、愛好会）の『会報』は、1973年に1号が出されて以来、年度末毎に発行され続け、2022年度末に50号に達した。このことは、発足以来、50年余の愛好会の活動が会員に受容され、継承されてきたことを物語っている。

この間の愛好会の会員の状況をみると、創設期の会員は、子育て中の主婦を含む、比較的若い専業主婦であったが近年はその様相に変化が見られる。とりわけ顕著な現象は、子どもの独立や自身の退職を機に60歳代、70歳代から卓球を始める例もあり、高齢の女性会員（以下、高齢の会員）の増加傾向である。このように高齢の会員が公民館の卓球サークルに活動の場を求めるのはなぜだろうか。この疑問に答えるように『会報』の40号から、従来とは異なる形で「寄稿文・感想文」²⁾の欄が設けられ、毎回30編前後の会員の作品が掲載されている。掲載作品の多くは公民館の卓球サークルや愛好会の親善大会に関する文章で、その表出からは作者の様々な思いが伝わってくる³⁾。例えば、掲載作品の中にある80歳の女性の「白球を追いてコート駆けめぐる 八十路来てなお挑戦やまず」⁴⁾という短歌には作者の卓球に寄せる思いが込められており、躍動的に卓球に挑む作者の姿が見えるようである。高齢という言葉には心身の衰え、孤立、保護が必要などのイメージが付随しがちであるが、この作品にそのような負のイメージはない。

本稿の関心は、高齢の個々の会員が卓球サークルにおいて上記の短歌の作者のように活力をもって卓球に取り組めるのはなぜか、何が個々の会員の活動の要件となっているのだろうかという点にある。

本稿の目的は、愛好会の高齢の個々の会員が、公民館の卓球サークルにおいてどのようなことを活動の要件としているのか探求することである。なお、課題解決に向けては公民館の卓球サークルと愛好会の活動との相互関係を視野に入れて検討するため、ここで対象にしているのは愛好会に入会している卓球サークルである。

検討の方法として、90歳代の会員、MさんとTさんに焦点をあて、『会報』40号から50号までの「寄稿文・感想文」の欄に掲載されている文章とMさんとTさんへのインタビュー調査の内容を資料に検討する。MさんとTさんの文章は、『会報』に複数掲載されており、その表出には作者の思いがよく映し出されている。Mさんの文章は、『会報』48号⁵⁾を除いて、40号から50号までに、合計13編掲載されており、Tさんの文章は、『会報』43号、45号、47号、50号のそれぞれに各1編、合計4編掲載されている。文章のテーマは、卓球や卓球サークルおよび親善大会でのソックス贈呈に関するものである。インタビュー調

^{*}九州大学大学院人間環境学府科目等履修生

査については、それぞれの居住校区の公民館において、2023年2月10日にMさんへの聞き取り、2023年2月21日にTさんへの聞き取りを実施した。

本稿に関連する先行研究には、前田恒子（1975）⁶⁾ および田中理恵子（2000）⁷⁾ 等があり、愛好会発足までの過程、「愛好会方式」⁸⁾ と呼ばれる試合方式が案出された経緯および愛好会の組織・運営についての決定過程、卓球サークルの運営方法などについての言及がある。また、中山博晶（2022）⁹⁾ は、公民館活動を基盤にした愛好会の歩みをたどり、『会報』づくりやボランティア活動への取り組みについて考察した結果、愛好会の活動の根底には「話し合いの文化」¹⁰⁾ があることに着目している。

以上、先行研究を概観したところ、愛好会の個々の高齢の会員に焦点を当てた研究はまだない。従って、本稿の意義は個々の高齢の会員、つまり団体を支える個人の視点から社会教育関係団体のあり方を考えようとする点にある。また、高齢の会員の活動への取り組みの要件を探求することによって、高齢者の人生を考える上での指標を提示することも期待できる。

本稿の構成は、はじめに、1. 愛好会会員の平均年齢の動向、2. MさんとTさんのプロフィール、3. 公民館の卓球サークルにおける仲間、4. 愛好会の「親善大会」、5. 「すべての人が平等の条件の中で思いっきり卓球を楽しむ」、おわりに、とする。

1. 愛好会会員の平均年齢の動向

愛好会の『30周年記念誌』¹¹⁾ には「サークル紹介」¹²⁾ のコーナーがあり、そこには愛好会に入会しているサークルの名称、構成員、練習会場、会員の平均年齢、サークルの紹介文などが記されている。同様に、10年毎の記念誌においても愛好会のすべてのサークルが紹介されている。それによって、愛好会の会員の平均年齢の動向をみると、『30周年記念誌』では50歳代が最多で59サークル¹³⁾、『40周年記念誌』¹⁴⁾ では、60歳代が最多で18サークル、『50周年記念誌』¹⁵⁾ では、70歳代が最多で7サークルになっている。全てのサークルの平均年齢が記載されているわけではないので一概には言えないが、どのサークルも経年とともに平均年齢が高くなっているようである。サークルの紹介文では「平均年齢が上がってきたためどのサークルとも同じような悩みを抱えています。（中略）みんなで休憩しながら楽しく練習に励んでいます」¹⁶⁾、「みんなで話し合い、助け合い、上達を目指し、（中略）楽しみながら、卓球を続けていきたい！」¹⁷⁾ など、会員の状況を考慮しつつ、積極的に活動している様子が伝えられている。

愛好会の会員の平均年齢の動向を把握した上で、以下では、二人の高齢の会員、MさんとTさんの卓球サークルへの思いを手がかりに、彼女たちが、サークル活動の要件としていることについて考えたい。

2. MさんとTさんのプロフィール¹⁸⁾

Mさん（94歳）は、愛好会の卓球サークルで最高齢の会員であり、Tさん（90歳）はそれに続く年齢である。二人の青春期は、戦争が人々の生活に影を落としていた時代と重なる。Mさんは18歳で結婚し、男女一人ずつの子どもに恵まれたが、二人は既に独立している。彼女は結婚後も60歳まで主婦以外の仕事もしていた。その仕事を辞めた頃、近隣の年長の主婦の誘いで、全くの初心者として居住校区の公民館の卓球サークルに入った。Tさんは20歳代の前半に結婚して以来60歳まで専業主婦であった。二人の娘に恵まれたが、二人は既に独立している。彼女は60歳の時、「市政便り」で居住校区の公民館の卓球サークルの存在を知り、全くの初心者として卓球サークルに入った。

卓球を始めた頃は、二人とも夫と共に暮らしていたが、その後二人とも夫を亡くし、現在はそれぞれ一戸建ての自宅で一人で暮らしている。

Mさんは、「優しい仲間にもまれて練習日が楽しみです。子どもたちは一人暮らしの私を心配してくれますが現在の生活が一番楽しみです」¹⁹⁾と、住み慣れた自宅で、サークル仲間との付き合いを楽しめる現状にある。Tさんも、「娘は二人いるんだけど、(中略)帰って来いとも言わない」といい、関東地方で暮らす娘さんたちと話し合いメールで日々の無事を伝えるなど、できるだけ備えはして、それぞれの生活を大切にしているそうである。高齢者は健康についても心配されるが、現在、Tさんには健康上の不安はなく、健康維持のために卓球を続けているという。²⁰⁾ Mさんも健康であり、自分が健康なのは「卓球のおかげ」だという。彼女は80歳を過ぎてから、高齢のために体力が衰えてきた5歳年上の夫の介護をすることになった。夫が在宅療養を強く望んだので、短期間の入院はあったが、Mさん一人で夫の介護をしたそうである。介護には非常に体力を要したが、卓球で培った体力でその困難を乗り越え、夫に深く感謝されたことを繰り返し話された²¹⁾。

MさんもTさんも卓球サークルで充実した活動が続け、できるだけ長く心身ともに自立して暮らしたいと願っている。

3. 公民館の卓球サークルにおける仲間

MさんとTさんはそれぞれ近くの公民館で、週に1回、2時間程度の練習をする。Mさんは入会当初、自身の技術が練習相手の技術に及ばず大変苦労したが、練習を重ね、次第に上手になると卓球が楽しくなり、「虜」になるほど好きになったのだという²²⁾。また、卓球が上手になるにつれてサークル仲間との親交も深まり、卓球サークルが楽しみ場となったのである。Mさんは入会当時からの自身の心境の変化を次のように述べた。

私、その時まで球にさわったこともなかったんですよ、それで行ってね。でも、見ると聞くとは大違いでね、(中略)それがね、やっぱり練習していると、今日は10球打てた、次は20球続いたで、だんだん受けられるようになり虜になってしまいました²³⁾。

また、卓球は夫をなくしたMさんの心の支えにもなった。その思いを「生涯の友“卓球”」と題した文章に「一人暮らしになり私の心をいやしてくれたのが“卓球”です。(中略)卓球好きはだれにも負けません」²⁴⁾と綴っている。

Mさんは練習日が来るのが楽しみで、金曜日の午後の練習には自転車で公民館に向かう。Mさんの楽しみの一つはコーチの指導である。コーチの声かけがあると、安心して練習ができ「技を覚える」²⁵⁾ことができるので嬉しいという。もう一つのMさんの楽しみはサークル仲間との交流である。Mさんは、92歳当時、サークル仲間への思いを「皆さんと練習をしている時は年齢を忘れています。仲間の皆さんに同じ目線で話をしていただくので本当に有りがたいです」²⁶⁾と記しているが、このMさんの思いに対してサークル仲間たちは「親善大会に毎年参加のMさん、ステージへのかる～い足どり。私たちのお手本です」²⁷⁾と、Mさんへの敬意を示すメッセージで応じている。また、Mさんの仲間を思う気持ちは、コロナの感染予防対策中に書かれた次の文章からも伝わってくる。

コロナ禍の中、一人暮らしの私は誰とも話さない日があります。(中略)密に気をつけながら練習をしますので会話もできません。でも、皆に会えるだけで心が明るくなります。
今では卓球が私の生きがい²⁸⁾。

上の引用文にあるように、Mさんは卓球サークルでの練習や仲間たちとの交流を、「生きがい」と感じているのである。また、彼女は血縁の親兄弟との縁が薄く、自身の子ども以外に親戚との付き合いはなく、近隣の付き合いもないという事情に触れ、「だから、ここの仲間がとっても大切なんです」²⁹⁾と強調された。

Mさんは94歳になってから、「練習中に怪我でもしたら仲間に迷惑をかけることになる」³⁰⁾という懸念から卓球サークルをやめようと思い、一時練習を休んでいたがインタビューに応じるために公民館を訪れ、久しぶりに練習に参加された。その際、Mさんは「スポーツは楽しいです、今日も何ヶ月ぶりかに来ましたけど、楽しゅうございました」³¹⁾と、しみじみとした表情で話された。

Mさんが卓球サークルの活動を30年間も継続できたのは、近くの公民館で大好きな卓球の練習ができ、信頼できるサークル仲間との良い付き合いがあったからだという。さらに、卓球のおかげで自身の健康が維持でき、体力もついたという思いからMさんにとって卓球サークルが大切な場所になったと考えられる。

一方、Tさんは、60歳の時に「『奥様』をやめよう！」³²⁾と思い、週に一度、火曜日の午前中に卓球サークルに行くことにした。次の引用は、公民館の卓球サークルを初めて訪れた頃のTさんの思いである。

女学校出てからは、私たちは花嫁修行。洋裁学校に行ったり、それで、まもなく結婚、ずっと奥様だったの。(中略)私はスポーツ嫌いな。だけど60になって、「何か人生変えなきゃね、ずっと奥様じゃつまらないかなー」と思って、で、恐る恐る公民館に行って、(中略)あの頃ゲートボールが流行ってたんですよ。だけど、女学校のとき、上級生がとても素敵なすごく綺麗な卓球をしていたの、(中略)初めて飛び出してみたら、仲間の方がいい方ばかりで³³⁾

上で語られているように、Tさんは、女学校時代の思い出に導かれて卓球サークルを選んだのだが、卓球サークルに入会後の思いを次のように話された。

それまで遊びを知らないじゃない、卓球を始めてから遊びを知ったし、お友達もできたから、(中略)面白いなって思ったことは、60から始めてもやめられない³⁴⁾。

Tさんは、卓球サークルでの体験を「遊び」と表現する程楽しいものとして受容しているのであろう。サークル活動で印象に残った経験について質問すると、Tさんは、しばらく考えた後で「みなさんが優しいとしか言えないわねー」と応じられた。彼女が卓球サークルに入った時からサークルのメンバーは変わらず、仲間との良好な人間関係ができ、サークルの雰囲気が自分に合っていたから30年間も続けることができたという。このように、Tさんは、卓球サークルに入ったことによって社会参加を果たした。この経験を通してTさんは積極的に行動するようになり、自身の興味関心に従って、公民館の「コーラスサークル」と「郷土史サークル」に所属し、それぞれの活動を楽しんでいるそうである。今後も「卓球サークルの活動を続けますか」という質問に、Tさんは「はい」³⁵⁾と明確に継続の意志を示された。

4. 愛好会の親善大会

愛好会の親善大会は年に2回、春と秋に開催される。愛好会に入会している卓球サークルが一堂に会しての親善大会は、参加者の多さや会場の雰囲気などによって初参加の会員は大変感動を受けるようである³⁶⁾。親善大会は、親善試合で卓球サークルでの練習の成果を発表し、参加サークル相互の交流を計るこ

とを主な目的として開催されるが、参加会員にとっては個々の会員が自身の卓球との取り組みを見直す契機を与えられる場ともなる。毎年親善大会に参加している M さんは、「最初は試合とかとてもじゃない、でも、試合にも行くようになりました。上手な人と打つと怖いけど伸びるんですね」³⁷⁾ と語る。そして、「丁度合うところにおいてもらって、出させてもらっていました。(中略) 勝った時はね嬉しいですけど、みんなで一緒に出てるから、負けてばかりじゃ恥ずかしい」³⁸⁾ と話された。「丁度合うところ」というのは、自分の卓球技術に応じたパートのことで、「愛好会方式」による試合はパートごとのリーグ戦で行われる。M さんはこの試合を通して、多くのことを学んだようである。パート内で勝ち進むと、上のパートに進むという希望がもてるし、負ければ、次の勝利を期して練習に励む。M さんは、卓球の技術向上の可能性へ繋がる親善大会を楽しみにしている。T さんは、「愛好会の行事だから協力しなくっちゃねー」³⁹⁾ と、親善大会への参加そのものに意義を見出している。T さんは親善大会の開会行事のひとつであるソックスの贈呈式も楽しみにしているようである。ソックスの贈呈式では、大会参加者の中で年長の会員に、愛好会から敬意を表し、賞賛と励ましの思いのこもったソックスが贈られる。その際、ソックスを贈られる年長の会員が澁澁として壇上に立つ姿は、後続の会員にとっての目標となり希望ともなる。T さんは83歳で初めてソックスを手にした。それ以後、彼女は2, 3年おきに『会報』の「寄稿文・感想文」の欄に、ソックス贈呈にちなんだ文章を寄せ、ソックスを贈られた喜び、サークル仲間への感謝、卓球に寄せる思いなどを表出している。初めてソックスを贈られた時は「このソックスが破れるまで頑張ることにするかなあ」⁴⁰⁾ と、控えめに意欲を示す。その2年後も、「勇気を出して壇上に1番先に登りました。『85歳』と言われましたが、私の気持ちは卓球の仲間に入れてもらった60歳と同じで全然成長しておりません。『この気持ちで続くならな…』と案じながらも、楽しい卓球のひとつが送れるように願っています」⁴¹⁾ と、卓球サークルに寄せる思いを記している。さらに、87歳の時には、「毎回練習が終われば『来週も元気で行くぞ』と体に言い聞かせながらルンルンの気持ちで帰ります… (でも87歳でどうかナ〜)」⁴²⁾ と、サークルで活力を得ていることを窺わせる反面、年齢に対する不安な気持ちものぞかせている。そして、90歳になった T さんは「六〇歳になって奥様から少々人生を変えたくて、近くの公民館にこわごとで行ったのに、三〇年も、九〇歳まで続くななんてびっくりです。(中略) 思いがけないハッピーな人生を送ることができて皆様に感謝感謝です」⁴³⁾ と、自身の考えに従って行動した結果、到達した心境を「ハッピーな人生」と表現している。

愛好会の親善大会は、公民館の卓球サークルでの活動の成果を発表し合う場としてだけではなく、サークル相互の交流を深めさらなる発展の可能性へ方向づける場として機能し、親善大会に参加することで個々の高齢の会員は公民館の卓球サークルでの活動をより充実させていると考えられる。『会報』の「寄稿文・感想文」の欄に寄せられた作品には、親善大会での経験や出会いが卓球技術の向上や他のサークルのメンバーとの交流につながり、個々の会員の意欲を高め活力を得ていることが多く表出されている。

5. 「すべての人が平等の条件の中で思いっきり卓球を楽しむ」⁴⁴⁾

これまで、主として M さんと T さんの表出を通して、高齢の個々の会員がどのような思いをもって公民館の卓球サークルに取り組んでいるか、また、何が卓球サークルの活動を続けるための要件となっているのかみてきた。その結果、個々の高齢の会員が卓球サークルの活動に取り組む要件として、以下のことが挙げられる。

まず、活動の要件とされるのは、個々の会員が、卓球そのものが好きなことである。加えて、高齢の会員が卓球サークルに活動の場を求めるのは卓球の特性にもよるのではないだろうか。卓球は競技スポーツであるが、年齢や体力に応じた取り組みができ、健康の維持や体力の増進、ストレス解消などへの有効性があると考えられる。

次に、サークル仲間との良好な人間関係が要件として挙げられる。MさんやTさんの例にみるように、卓球の練習を通して協力したり、競争したり、励まし合ったりする過程において育まれたサークル仲間との人間関係は個々の高齢の会員の生きがいにもなる。

さらに、卓球サークルの活動の場が居住校区の公民館であることが要件とされる。練習会場が自宅から近い場所にあり徒歩や自転車で通えることは、サークル活動をする高齢者にとっては大きな利点である。

そして、既述したように、愛好会の親善大会は公民館の卓球サークルの活動をより充実させるために、個々の高齢の会員だけではなく愛好会の全ての会員にとって重要な役割を担う。

以上、個々の高齢の会員が卓球サークルの活動への取り組みの要件としていることを挙げたが、次に引用する80歳代の女性会員の文章には、愛好会のあり方を受容し、その継承に望みを託す個人の思いが集約されている。

今日の試合の結果は三位でしたが、仲間みんなで楽しめました。また、お年よりのお祝いまで頂いて、しみじみと思うことがあります。この年までよく続けられたのは“こんな楽しい皆さん”がおられたからです。もう年だから試合に出ないという、まだまだと引きとめられます。(中略)主婦卓球愛好会はこのように年令さらに初心者もベテランも関係なく楽しめます。特に、福岡市は公民館活動が充実しており、無料で使わせてもらえます。先輩たちの努力が今実っているのだと感謝しています。これからもずっと続けられる環境を守っていけるよう頑張りたいと祈っています。⁴⁵⁾

上記の引用文中の「年令さらに初心者もベテランも関係なく楽しめます」という一節が、愛好会の創始期に掲げられた「すべての人が平等の条件の中で思いっきり卓球を楽しむ」という愛好会の活動の底流にある理念に呼応して、その理念が今日まで継承され、個々の高齢の会員の活動の拠りどころとなっていることを思わせる。

おわりに

愛好会の会員は、自ら考え、独善や独断に陥らず、話し合いを重んじ、学習を重ねるという努力を重ねた結果、時間や年齢を超えて受容される組織を確立させた。そしてその活動は、90歳の会員の『『生涯卓球』として続けたい』⁴⁶⁾などの文章にみるように、今後も継承されることが期待されている。そしてその期待に応えるために、実践を通して卓球に興味のある若い人たちに働きかけ⁴⁷⁾たり、「若い方の入部」⁴⁸⁾を歓迎したり、『会報』を通して、愛好会の創始期における先人たちの努力⁴⁹⁾や愛好会の出来事⁵⁰⁾を語り継ぐことによって継承に繋がる努力がなされているように思う。

「会報とは」⁵¹⁾に愛好会の『会報』は「自分たちで作上げていく会と言うことをPR」し、「組織の存在を社会に認めてもらうという大事な要素」を含み、かつ「記録として残しておく会の財産でもある」と記されているが、『会報』に掲載されている個々の会員による作品は、すべて愛好会の活動の軌跡となり、愛好会の活動が継承されるための道標ともなる「会の財産」であろう。

【注】

- 1) 本稿においては、便宜上65歳以上を高齢者とする。
- 2) 『会報』40号、2010年、pp. 41-48
- 3) 『会報』40号(2012年)～50号(2022年)までに、267作品が掲載されており、のうち「卓球」や「親善大会」をテーマにしている作品が230余ある。作者の年齢についていえば、65歳以上の会員によるものと確定できる作品が各号に3分の1程度は含まれている。

- 4) 『会報』42号, 2014年, p. 54
- 5) 『会報』48号(2020年)は、コロナ禍で、活動が制限された時期に発行されたため、卓球に関わる掲載作品が少ない。
- 6) 前田恒子「わたくしたちがめざす公民館―主婦卓球愛好会の活動のなかから―」『月刊社会教育』第19巻5号、国土社、1975年、pp. 30-37
- 7) 田中理恵子「公民館サークル活動と公民館―福岡市主婦卓球愛好会の活動を通して―」『月刊 社会教育』第44巻6号、国土社、2000年、pp. 13-19
- 8) 「愛好会方式」は、「すべての人が平等の条件の中で思いっきり卓球を楽しむ」(前田1975年、p.33)という理念を実現するために、下記のように案出された「愛好会は(1)初心者でも参加できる会、(2)楽しい仲間づくりをする会、(3)競技のみを目的としない会とし、特にプログラム作成には会員全体の声を取り上げ、チームのリーグ戦を第三回大会から続けています。ランク別に、さらに初心者チームを混合にして、上手下手にかかわらず同じ回数出場が必ずできるということにしました。四シングル、一ダブルスは、…四人から六人のチームを各グループごとに作り、ダブルスは、特定の人と組まず、必ず入れ替わることにしました」(前田、前掲、1975年、pp. 33-34)
- 9) 中山博晶「地域スポーツ最前線 第⑦回 女性たちの学びと地域スポーツ―福岡市主婦卓球愛好会の歩みから―」『月刊 社会教育』第66巻7号、旬報社、2022年、pp. 70-73
- 10) 中山(2022年、p. 70)
- 11) 『輪と和 2001創立30周年記念誌』, 2001年
- 12) 『輪と和 2001創立30周年記念誌』, 2001年、pp. 54-126
- 13) 『30周年記念誌』によれば72サークルのうち70サークルに平均年齢の記載があり、40歳代が7、60歳代が4サークルとなっている。
- 14) 『会報 創立40周年』39号(2011年、pp. 22-77)によれば、55サークルのうち28サークルの記載があり、50歳代が6、70歳代が4サークルとなっている。
- 15) 『会報 創立50周年記念誌』49号(2021年、pp. 9-51)によれば、37サークルのうち9サークルの記載があり、80歳代と60歳代が1サークルとなっている。
- 16) 『会報』49号, 2021年, p. 16
- 17) 『会報』49号, 2021年, p. 18
- 18) ここでのMさんとTさんに関する記述は、インタビュー調査(2023年2月10日および2023年2月21日)で得た情報による。
- 19) 『会報』42号, 2014年, p. 44
- 20) Tさんへのインタビュー(2023年2月21日)
- 21) Mさんへのインタビュー(2023年2月10日)
- 22) Mさんへのインタビュー(2023年2月10日)
- 23) 同上。
- 24) 『会報』42号, 2014年, p. 44
- 25) Mさんへのインタビュー(2023年2月10日)
- 26) 『会報』47号, 2019年, p. 46
- 27) 同上。「ステージへの…」というのは、Mさんがソックスの「贈呈」を受けるためにステージへ向かっていることを指している。
- 28) 『会報』49号, 2021年, p. 75
- 29) 同上。
- 30) 同上。
- 31) 同上。
- 32) Tさんへのインタビュー(2023年2月21日)
- 33) Tさんへのインタビュー(2023年2月21日)
- 34) Tさんへのインタビュー(2023年2月21日)
- 35) 同上
- 36) 『会報』40号, 2012年, p. 44
- 『会報』43号, 2013年, p. 39
- 37) Mさんへのインタビュー(2023年2月10日)
- 38) Mさんへのインタビュー(2023年2月10日)
- 39) Tさんへのインタビュー(2023年2月21日)
- 40) 『会報』43号, 2015年, p. 37
- 41) 『会報』45号, 2017年, p. 44
- 42) 『会報』47号, 2019年, p. 47
- 43) 『会報』50号、2022年、p. 38(「102回卓球大会に出席して」)

- 44) 前田 (1975年, p. 33)
- 45) 『会報』 43号, 2015年, p. 44 (「卓球と私」)
- 46) 『会報』 42号, 2014年, p. 46
- 47) 『会報』 48号, 2020年, p. 44 (「古希に思う」)
- 48) 『会報』 50号, 2022年, p. 39
- 49) 『会報』 50号, 2022年, pp. 46-47 (「主婦だからこそ」)
- 50) 『会報』 48号, 2020年, p. 45 (「特別な日」)
- 51) 毎号の『会報』の巻末に、記されている初代会長の前田恒子氏の文章。